発行　いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集　図書委員会
昭和54年2月1日

ビブリア

No.33
福島高専 図書館報

人生の先達から

読書漫筆

——読んで・求めて・迷って・書いて——

後に続く者へ

きつかけ
—前号のビブリアを読んで—

電気工学科　大沢信義

山野先生のお書きになった文を読んで，神とは怨霊封じであるとの見方をされる梅原猛先生（現在 学長，哲学者）に大いに興味を覚えた。早速梅原先生の著書を見ようと私の本棚を探したがあるはずがない。しかし先生のお名前は確かに脳裏のどこかにあった。あれこれ探していると「朝日ゼミナール」（昭和45年版 12冊全集）の中に先生のお名前を発見することができた。演題は「生きがいとは」である。

昭和45年当時，我国の産業界は高度成長期の最盛期で中卒者を「金の卵」ともてはやし人手集めに躍起になっていた。一方，学園紛争の頂点でハイジャック「よど号」事件のおきたのもこの頃である。このような時代背景をふまえて朝日新聞社が「70年代の情報化社会に対応して……各界の一流専門家に講師を委嘱し，新しい知識と高い教養を市民に提供する生涯教育の場」として企画したものである。少々話は古いがお正月でもあるので読むことにした。

「生きがいとは」。今ストレートに「お前生きがいを感じたことがあるか」と誰かに聞かれたら，私は直ちにあれこれと頭に浮かぶが，さて適切な言葉にはならない。しばらく考えても多分「……うん」となる。

さて，我国一流の哲学者，評論家，文学者，小説家，科学者，企業家の講師の方はどのような答えをするであろうか。非常に興味を感じた。哲学者・評論家は主として「生きがい」の根源を飢餓の恐怖におき，さらに宗教，近代文明の価値と「生きがい」を結びつけている。即ち「生きがい」という言葉は戦前戦中もあったかも知れないが余り問題にはならなかった。戦後，平和さらに産業界の高度成長のおかげで完全雇用を通り越し人手不足，このため人はたいした技術・技能がなくても職につくことができる。一方町には物が溢れている。大概の欲望は満たされる。即ち古典的な意味での「生きがい」のあった時代，つまり餓死の恐怖が強く働いている時代には「生きている」ことだけで意味があった。ところが戦争（死），飢え（死）の恐怖が薄らぎ，どこへ行っても食えることになると「生きている」ことだけではなく，そのほかもう一つの意味がないと満足できなくなった。このあたりが「生きがい」論の源である。さらにまた人間社会の秩序や国家間の

秩序も「飢え」が根底にあり宗教もまた「飢え」からの恐怖心が基盤となっている。さて人間は宗教を信仰し，神・仏を信じている限り時間的にも空間的にもある種の目標があり，こゝに「生きがい」があった。しかし近代人は宗教にかわり，科学技術を信じ人間による自然支配，科学技術の文明を発展させた。こゝで近代人は「生きがい」の問題を科学技術による自然支配。もろもろの欲望の満足。進歩の思想に求めていると。また歴史家，小説家は主として吉田松陰・坂本龍馬など歴史上の多くの人物をあげ，彼等の思想，行動を考察し「生きがい」と「死ぎがい」とは全く表裏をなしているとしている。これらのことから要するに人間の「生きがい」の問題は，その時代と社会環境，その人の境遇に大きく支配されていると思う。

例えば，東南アジア諸国留学生たちは早く先進工業国に追いつき，立派な工業製品を自分たちの手で生産したいと大きな夢を持っているのに対して先進工業国の青年たちは「将来何をしたいか。将来どうなるか」の問いに多くの場合「わからない」「ほんとうにどうしていゝかわからない」また，「先輩たちが何もかもやってしまって私たちにはもうすることは何も残っていないじゃないか」という答が返ってくることもあるという。現在，日本を含めた先進工業国の青年たちは全く自分の未来像を描けず目標感覚を喪失していることを物語る。

昔「生きる」という映画があった。この映画の荒筋を書きペンを置こう。毎日無気力に書類をみている，全くうだつのあがらない市役所の老公務員がこの映画の主人公である。彼はけだるそうな仕事の合間，時折薬を飲んでいる。或る日彼は医者から「胃がん」と診断される。そこで彼は大いに悩み，酒でその苦痛を忘れようとする。……ができない。あれこれ悩み迷った末，あと数ケ月の命をいかに生きるかを考える。その時彼はたまたま住民から児童公園建設の陳情書の出ていることに気づく。そこで彼は数ケ月の命を児童公園の建設に使うと決意し奔走する。突然の彼の情熱的な言動に上司を始め周囲の人々は驚くが，一下級老公務員の話など相手にしない。しかし彼はあらゆる困難を克服し，奔走し遂に有力な市会議員を動かすことに成功する。しばらくして市議会で児童公園の建設が決議される。そして誰もいない静かな夜，建設された児童公園のブランコに揺られてその老公務員は死んでゆく。あのラストシーンは忘れられない。

さて，最後に各自の「生きがい」の問題は各自の「人生観」の問題であると単的にまとめて結論にしよう。

おかげで今年の正月は大へんに大きな問題ととりくみ楽しく意義のある日を送ることができた。

“環境アセスメントとは何か？„

土木工学科　高　橋　邦　雄

1. はじめに
2. 花は美しく咲く
3. 環境アセスメントとは？
4. 開発側と住民との通訳
5. おわりに

1．はじめに

近年，「環境アセスメント」という言葉が流行語のように言われている。だが，その中味は雲をつかむようでわからないという人が多いのが現実であろう。

本校でも環境科学教育の研究施設として環境科学センターが建設されており，今春にはそのセンターで地域の環境問題解決のために研究がスタートすることになっています。

そこで，今回はセンター設置を間近にして，環境科学教育委員会が，ここ数年，試行錯誤しながら行って来た，高専における環境工学の講義，研究を中心に人間と自然環境とのかかわりについて考え，環境アセスメントとは何か？　について，少し述べさせていただき，現行の環境アセスメント実施機関を表－1に示し，高専における環境工学の位置づけをしてみたいと思います。

2．花は美しく咲く

先日の木田先生（国立教育研究所所長）の講演の中に「生物はしだいに美しくなってきた，花もチョウも美しくなってきた。……」何とすばらしい言葉ではないかと思いました。しかし，自然界に目を転じて，人間の行動が環境を変えて来た足跡をみると，次の言葉も現実の出来事としてうかんで来ます。

「Silent　Spring」沈黙の春（レーチェル・カーソン著）の中の「湖水のすげは枯れ果て，鳥はうたわぬ。アメリカでは春がきても自然は黙りこくっている。……。」

人間をとりまく自然環境は，生態系のバランスがとれていた時代は，花も美しく咲いていたが，人口の急増，消費エネルギーの増大と資源の枯渇，自然浄化の

限界と生態系のバランスの崩壊によって先進国から発展途上国へ，大都市から地方都市（農村）へと環境破壊が進み，そのつけ（浄化）のまわしがきかなくなった時に環境問題が顕在化して来た。

今日，環境問題として顕在化した社会問題を掲げてみますと次のようなものがあります。（金田教官調べ）

※　化学物質がひきおこした社会問題

◦水俣・阿賀野川有機水銀事件　◦カドミウム・イタイイタイ病事件　◦カネミ・PCB油症事件　◦サリドマイド奇形事件　◦スモン病，その他

※　大規模開発による社会問題

◦本四連絡橋環境評価問題　◦各地原発問題　◦新幹線，高速道路の騒音・震動問題，その他

3．環境アセスメントとは？

では，上述の環境問題解決のため生れた環境アセスメントとは何なのだろうか？

—定義—（国連環境計画）には“Environmental Assessment”，（E・A）とは「人間の行動が環境を変える恐れがある時にどうしたらよいかを評価し決定するための行動」である。とし，特に「環境の変化に関する情報を確認し，予測し，分析し，公表（評価）する行動」を環境への影響アセスメントと呼んでいます。通称，環境アセスメントとは後者を言っています。

ここで環境アセスメントを展開するための前提条件として，環境問題に対するアセスメントの誕生した社会的背景と必要性は前述のとおりでありますが，日本に於ける環境アセスメントの位置づけ・性格づけをしておきますと，

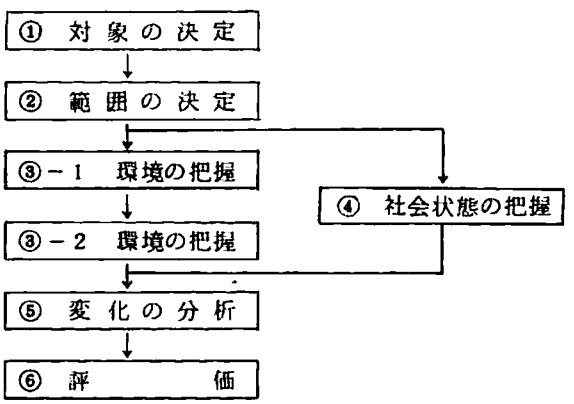
a）開発と保全との調整による問題解決

b）問題解決志向型・目的志向型サイエンス

c）制度化による実行性の確保

このa)，b）の開発と保全との調整による問題解決を志向するために，環境の変化に関する情報を集収，確認し，事前に問題点を指摘し，マイナス面が出る恐れのあるものについては，広範な影響範囲を把握して全体としてプラスになるように多面的・長期的に総合評価し，マイナスをいかに除去するかについての情報を得るシステムであります。また，環境アセスメントは少なくても次のステップによって進められます。（図－1）①何に対してアセスメントをするのか。②対象をとりまく環境の範囲を定める。③分析対象の環境のメカニズムを解明する。（人為的インパクトを含む）④環境のさまざまな変化を分析・予測する。⑤環境の変化を評価し公表する。

図－1　E・A のフローチャート



表－1　環境アセスメント実施機関　（五十音順）

㈱アイ・エヌ・エー新土木研究所
アジア航測㈱
荏原インフィルコ㈱
㈱エフ・アイ・ピー（旧.富士通ファコム㈱）
㈱オオバ
㈱オリエンタルコンサルタンツ
㈱沖縄環境保全研究所
㈳科学技術と経済の会
㈱環境管理センター
環境アセスメント研究室
㈱環境アセスメントセンター
㈱環境技術研究所
㈱環境分析センター
神奈川ポリューションエンジニアリング㈱
建設企画コンサルタント
㈱建設技術研究所
㈱構造計画研究所
㈶国土開発技術研究センター
㈱国際開発コンサルタンツ
㈱三貴設計
サンコーコンサルタント㈱
㈱サンコー環境調査センター
三洋水路測量㈱
新日本気象海洋㈱
㈱日本技術コンサルタント
清水建設㈱
㈱数理計画
㈶政策科学研究所
成和コンサルタント㈱
センチュリリサーチセンタ㈱
セントラルコンサルタント㈱
全日本コンサルタント㈱
㈱太陽機構
㈱ダイヤコンサルタント
㈱宅地開発研究所
玉野測量設計㈱
㈱地域計画・建築研究所
中央開発㈱
中央復建コンサルタンツ㈱
㈱長大橋設計センター
㈱帝人環境技術センター
㈱東京久栄
㈱東京建設コンサルタント
東京芝浦電気㈱
東北緑化環境保全㈱
㈱東洋情報システム
東レ・エンジニアリング㈱
㈶栃木県公害防止管理協会
㈱トデック
中日本建設コンサルタント㈱
西日本シンクタンク㈱
日本アイ・ビー・エム㈱
㈱日本科学技術研修所
㈱日本環境工学設計事務所

(財)日本気象協会
日本技術開発(株)
日本工営(株)
(株)日本港湾コンサルタント
日本情報サービス(株)
日本テトラポッド(株)
日本電子計算(株)
(株)日本リサーチセンター
(株)日本ビジネスコンサルタント
(株)日建設計
(株)野村総合研究所
(株)間組
パシフィック航業(株)
パシフィック・コンサルタンツ(株)
フジタ工業(株)
(株)復建エンジニアリング
(株)美蓉情報センター
防災都市計画研究所
(株)ブレック研究所
北海道開発コンサルタント(株)
(財)北海道環境科学技術センター
(株)北海道環境保全エンジニアリングセンター
北海道ビジネス・オートメーション(株)
前田設計(株)
(株)間瀬コンサルタント
(株)三菱総合研究所
八千代エンジニアリング(株)
山岡設計コンサルタンツ(株)
(株)ユージー都市設計
四電エンジニアリング(株)
(財)リモート・センシング技術センター
臨海総合調査(株)
(株)大林組
鹿島建設(株)
(社)環境アセスメントセンター
(株)環境開発研究所
九州建設コンサルタント(株)
(株)国土開発センター
国際航業(株)
国土防災技術(株)
大成建設(株)
大日本コンサルタント(株)
千代田ディムス・アンド・ムーア(株)
東洋航空事業(株)
(株)ナック
日本エヌ・ユー・エス(株)
日本建設コンサルタント(株)
日本電気(株)
日本ビジネスオートメーション(株)
八洲測量(株)
東日本航空(株)
(株)福山コンサルタント
(株)フジミック
三井情報開発(株)
(財)未来工学研究所
(株)リジョオナル・プランニング・チーム
ワールドオーシャンシステム(株)

自治体一覧（北から南へ）

札幌市	福島市	神奈川県	愛知県	芦屋市	福岡市
釧路市	相馬市	川崎市	知多市	奈良県	長崎県
青森市	いわき市	新潟県	滋賀県	奈良市	佐世保市
むつ市	栃木県	石川県	草津市	鳥取市	熊本県
岩手県	群馬県	七尾市	京都府	島根県	日田市
秋田県	高崎市	山梨県	京都市	岡山市	宮崎県
秋田市	埼玉県	岐阜県	大阪府	大竹市	延岡市
酒田市	新座市	静岡県	宇治市	徳島県	沖縄県
宮城県	市原市	静岡市	兵庫県	鳴門市	那覇市
福島県	君津市	清水市	尼崎市	松山市	糸満市

次に，環境アセスメントのための予測・分析手法については紙面の関係で現在使われている各種モデルを記すに止めます。

i）大気汚染拡散モデル
ii）水質汚濁シミュレーションモデル
iii）水資源配分モデル
iv）土地利用計画モデル
v）騒音・振動シミュレーションモデル　等

4. 開発側と住民との通訳

さて，いかに環境アセスメントを行ったからと言ってすべての環境問題が解決されるものではなく，アセスメント自体が未知・不確実性を伴った解決策であり個別性・地域特性を考慮し，開発側と住民との現場住み込み方式で解決される以上制度化によって，アセスメントの実行性を確保する必要があると思われます。

また，アセスメントの結果を公表する方式は，我が国においてはまだその途についたばかりであると言ってよく，アセスメントを真に実行し，定着させるためには，アセスメントが国・地方自治体・開発事業者と住民との間の通訳としての役割であることをそれぞれの立場で理解し，実践して行くことが大切であると思われます。表－1に現行の環境アセスメント実施機関を示します。

5. おわりに

以上，環境アセスメントについて概略を述べてきましたが，日本ではまだ制度化されておらず，その手法においても一定の方法・大系化がなされていない現状で「高専における環境科学教育はいかにあるべきか」は今後研究される緊急の課題であることは言うまでもありませんが，卒業後，現場の第一線で働く高専生に少しでも環境アセスメントと言う言葉を知っていてもらいたいために紙面をおかりしました。最後に，環境アセスメントについての新刊案内をして結びといたします。

(1) 地方自治体の環境アセスメント ：黒崎日出雄著
(2) 住民自身による環境アセスメント
(3) 地域環境管理計画の立て方 ：岡本憲之著
(4) 環境アセスメント報告書の作り方：大槻忠著
以上 武蔵野書房
(5) 環境アセスメント 原則と方法：島津康男訳
環境情報科学センター
(6) 環境アセスメントの基礎手法 ：吉川博也著
鹿島出版会
(7) 生と死の妙薬：レーチェル・カーソン著
青樹築一訳
新潮社 ￥500

卒業の前に

5M 目黒 一

春，五年生となって就職はどうなるんだろうなどと考えていたら，もう目の前に卒業がぶら下がっている。

五年間というのは，いざ思い出してみようとすると，いろいろなことがありすぎて，まとまりのつかない期間であったと思う。それでもその時，その時の記憶というのは，頭の中で勝手に作り変えられ，自分の都合のいいようにできあがってしまっているが，確かに生きている。

僕は，入学してから四年間，寮にいた。寮生活は自分にとってよかったのかどうかはわからないが，学生時代にかなりのウェートを占めていたのはまちがいない。集団生活というのは，自分をまるっきりそこに埋没させて妥協してしまうか，一人浮かびあがってしまうか両極端の危険性を持っていると思う。そこで自分をどんな立場に置いたらいいのかわからなくなってしまった時もある。けれど，夜遅くまで友だちと話しこんで，意見が対立したり，この野郎がこんなことを考えているのかと驚いたりした。今考えてみると，くだらないことだったと思えるようなことに時間をつぶしたものである。それが何らかの形で自分に役立っているなと気づくのにはまだ時間がかかるのだろうか。

寮にいる間，何べんか出たいと考えた。結局いつまでも実行できないで四年間，僕を寮におかせた強い理由はなく，単に経済的なものに過ぎない。家族に常に反対され，寮を出さしてもらえなかった。今の下宿に入ったのも，家の人に許されたわけではない。事後通告という形で，下宿を決めてきたから，寮を出ると電話して親に許可をもらったのである。こんなことをしてまで寮を出た理由は何だったのだろうか。退寮すると決心したときは，かなり強い理由を持っていたはずなのだ。なぜなら，家に電話したとき，ほとんど「だめだ。」という言葉を聞くことがなかったのだから。随分かっこいいセリフを吐いたのだろう。それとも親の言うことを聞いてなんかいなかったのかもしれない。

強い理由を持っていたはずだというのは，ほとんど今，思い出せないでいるからだ。僕はそのころ，寮の「くずかご」に，たぶんこんな文章を書いていたと思う。

―寮はたしかに便利であり，住むにはこんなよいところはないでしょう。しかし，いつまでも寮の中にいると，自分がまるで進歩していないような気になってしまうのです。そこで寮を出て寮生活を考えてみようと思うのです。―

といったかなりな言い訳をしている。たぶんこれに近いようなことを電話口でいったのだろう。寮を出る理由はいつの間にか，正体不明になってしまった。出たい欲求がかたちよくなって表われていたにすぎない。

しかし，四年生で寮を出ようとしたのはまちがいではなかったと思う。寮と学校，それにクラブをやるための体育館，といった三角形の辺ばかり歩いていた僕が，寮のかわりに下宿を新しくいれたことによって変わったかどうかはわからない。そう毎日変化のある一日が送れるわけではないし，一人になって自分だけの時間が増えたわけでもない。のに，何かが違うのである。充実感というか，ほんとにいいなと考えることができたのだから，出たのはまちがいとはいいたくない。

最初は，寮生時代のことを書くはずだったのに，退寮前後のことに話が集中してしまった。それだけに今，寮生活はなんだったのだろうと考えてしまうのである。結局，親もとを離れて不安な時は，先生方にいろいろ助けてもらえて寮はいいと思っていて，学年が進むにつれて，そんなことがわずらわしくなる。ということを確認するためのものだったのだろうか。

僕はさっき，「三角形」と書いた。本当なら学校とクラブとは，クラブが学校の中に含まれ，寮の生活と学校の生活という具合になるべきなのだろう。でもクラブの五年間は，学校とは違うような気がする。だから三角形なのである。

僕にとって，クラブの先輩というのは忘れられないし，同級生，後輩というのもいい仲間である。それはクラブを離れれば他人であっても，クラブでは一つの目的に向かっていることができた。

一年，二年のころ練習がいやでやめようとした。クラブなのだから，その気になればすぐやめられたのに，そうしては失ってしまうものに気づいていたから，いつまでもクラブにへばりついていたのだろう。

練習をちょっとさぼって，体育館の外に出てみると，グラウンドでは他のクラブが練習しているし，体育館からは，ボールの音とみんなの声が聞こえてくる。そうすると，何となく後ろうたいような気分におそわれてきて，やりたくないなと思いながら，また練習にのめりこむ。そんな毎日のくりかえしがよかったのである。二学期になって，クラブがなくなった時，前にクラブで使っていた時間をどうやってつぶすか苦しんだ。それだけ自分にとってあたりまえの時間になっていたのである。

三角形の二つの頂点のことを書いて，残っているのは学校だけになった。でも，まさか五年間，学校に関するものの中にいたわけではない。けれども，その他のことに関しては僕はまるで不器用だったとしかいえない。趣味らしい趣味を持っていたわけではなく，時間をつぶすのには本を読んで過ごしたので，趣味の欄は「読書」と書くしかなかった。趣味ばかりでなく，ある程度の遊びというのを知っておくべきだったのだろうか。

学校での思い出，これは一生残るだろう。それも授業などでは決してなく，休み時間のこと，そして学校生活全体のことである。

その学校生活全体について不満はなかった。それが最近，なんとなく窮屈に感じるのはなぜなのだろう。すでに，半分学生でないような気持ちになっていて，学校の規則がいやになってきているからだろうか。前はもっと学生の思うようにやれたと思っていたのは，僕だけだったのだろうか。

五年間，楽しく過ごしてきただけに疑問符を残していきたくはない。また結論を出す時間も残っていない。僕らはただ去っていく人間であり，春になれば新入生を迎えて学校はいっぱいになり，忘れられてしまう。そのころ僕は，学生時代はよかったなとか，悪かったなとか一言でかたづけているのだろう。とにかく，卒業はもうすぐである。

読書について

5E　小宅広幸

読書というものは，その方法論だけでも本として売られているくらいですから，人それぞれに違った読書の方法をもっているものですし，それだけの種類の読書論があるのですから，私の本を読んだことからの経験などは取るに足らないものですが，何かの参考にと思い，ペンをとらせて頂きました。

私が本を読み始めたきっかけというのは，私が中三の時に近所の親しかった高校生から十数冊の日本文学ばかりの文庫本をもらったことでした。せっかくもらったものを読まずにおくのはもったいないし，高校生は本を読むものだというそれ以来の先入観も手伝って最初は日本文学ばかりでしたが何とはなしに読んでいました。日本文学は読み易いものが多く，感情的に馴染み易いからだと思います。高専三年の頃から食わず嫌いだった外国文学にも手を付けました。外国文学は「翻訳されたもの」であるという事実からいろいろな欠点が指摘されていますが，量・質の両面から言っても外国文学の方が勝っていることは否定できない事実でしょう。翻訳されていることを前提として訳された別のもの（日本文学化した外国文学とでもいうべきか）として読むことによって，日本文学以上に楽しめるものとなるでしょう。しかし，外国文学を読むに当って注意すべきことが一つあります。それは訳者を読者が選べるという利点と，訳者を読者が選ばなければならないという背中合せの欠点を持つことです。外国文学は同じ本に対してたくさんの訳が出ています。訳者によっても，訳された時代によっても，文体・言いまわしが違っています。自分に合っている訳を見つけることがbestですが，訳を比較することは容易ではありません。そこで，定評のある訳を読むことを勧めたいと思います。たとえば，岩波文庫で読むことも一手ですし，知名度の高い訳者を選ぶことも一手です。私個人としてはできるだけ古い訳の方が文学的な表現（直訳的でない）で書かれているものが多いのでよりbetterだと思います。

文学書というのは，その小説が書かれた時代背景を知らないとぜんぜんおもしろくなくなるものもあるし，また，その作者の基本的な思想的立場を知らなければ作者の意図が伝わってこなくなりがちです。よく，一人の作家の作品を読み通してはじめてその作家が小説

というものを通して何を訴えようとしているのかが解って来ると言われますが，思想的知識の有無はその解り方に大きな違差を与えます。そのためにも宗教的な書物を前もって読んでおくことを勧めます。日本文学を読むなら仏教（特に親鸞と道元）とキリスト教に関する知識は必要ですし，外国文学にはギリシャ神話と騎士道，それにキリスト教程度の知識があった方が良いでしょう。要するに精神のバックボーンを知ることは小説自体を読むこと以上に必要なわけですし，小説を読むことの目的が結論的にそこに行くことも多いのです。

話は変わりますが，その時代時代には若者によって読まれた本が必ずあり，後に彼らが時代を荷う時が来る時，彼らの精神を形成する柱となったその本に流れる思想が，時代の倫理感，道徳感ないしそれらに近いものを形成すると言われています。聞くところによりますと，一世代前，倉田百三氏の著書がそれらの一部をなしていたそうです。今のマスコミの時代に，マスコミとは独立にそういう本が存在することを望むことは無理かも知れませんが，それに近い意味の本を自分なりに探すことが大切だと思われます。

本を読むことは全く個人的な行いです。本は自分で探し出したものほど印象に残ります。目録のページをめくって，あるいは本屋の棚の中から知られざるベストセラーを見つけ出したときの感慨はまたひとしおです。また，人から勧められた本は，ある程度興味を感じたら，ぜひ読むことを勧めます。自分で探すよりもかなり効率的に良書を見つけ出せることは間違いないようです。

最後に，今まで読んだ本の中で印象に残っている本を紹介させて頂きます。本は読んでも忘れて行くものです。読んだら，その本の印象や感想を簡単にでもまとめておくとかなり忘れにくくなるものです。読みすてだけはさけるようにしたいものです。

- 出家とその弟子　（倉田百三）
- 冬の旅　（立原正秋）
- 沈黙　（遠藤周作）
- 氷点　（三浦綾子）
- バラバ（岩波文庫）（ラーゲルクヴィスト）
- 人はすべて死す　（ヴォーボワール）
- アクアク　（トール・ヘイエルダール）
- 二十歳のエチュード　（原口統三）
- 典子の生きかた　（伊藤整）

「人間らしさ」の構造を読んで

～「生きがい」を求めるための出発（たびだち）～

5C　平塚　かすみ

卒業，就職という転機を目前にして，私の生きがいとは何であるか，何の為に人間は学び，働くのであるか，そのことについて随分と考え倦ねている日々の中で，私は，この本と出会った。

生きがいについて考える際，やはり「人間らしさ」ということも考えなければならないであろう。

如何に，生きがいを持って生きるか，与えられた人生の中で，如何に自己に忠実に生きられるか，それは，自己の努力と勇気とで随分と変化して行くものであると考える。

作者，渡辺昇一氏は，全くの戦中派であるが，氏の人生体験は，戦中派に見られるような，どこか暗く，そして教育勅語どおりに生きてきた人達とは非常に異なる。自己に忠実に生きてきた人の文章というものは，とても自信に満ち，読む側にも説得力があるものである。

私達は，物事を判断する際に，ある一定の枠の中で考える。枠というものは，他人や社会や伝統が決めてくれた価値である。つまり，氏の言う「外側の物指し」である。私達個人が，個人であることを徹底的に尊重される為には，自分の意識の中にある「内側の物指し」を大切にしなければならない。「内側の物指し」とは，価値の尺度が自己の心の内なるものにあるということで，そこから生きがいを見い出さなければならない。と，氏は言っている。自分の生きがいや目指す道というものは，他人やまわりの環境によって決められてはならないと思う。

それでは，内なる心から自己の生きがいを見つける為には，どうすれば良いのであろうか。

氏の生きがい論は，性善説に基づく。人間は，本来善であるという性善説を私は，信じている。人間が，「善きもの」であるが故に，自己に内在するものを実現しようとするのであると思うし，その為に，人間は皆，努力し，それを生きがいとしているのではないだろうか。私達の善き可能性を成長させ，実現する為には，先ずその可能性を引き出さねばならないと思う。

その可能性を引き出す為に「教育」というものがあるのではないだろうか。現代だからこそ，個性を伸ば

す為の教育などと盛んに言われているが，以前は，むしろ，型にはまった人間を形成することが望まれた。そのことを考えれば，私達は，自己の可能性を引き出すということにおいては，とても良い環境に恵まれていると思う。現在は，誰もが学校に入れる世の中である。自己の目指すものが，理系・文系であるにかかわらず，そのような専門をマスターする学校は，いくらでもあるし，自分の能力に応じて学ぶことができる。又，学校に行かずとも通信教育や専門の書物には，いくらでも出会うことができる時代なのである。

私も，専門学校と名のつく所で学んだわけであるが，果たして，私の内在する可能性は，引き出されたであろうか。否，私の内在する可能性は，専門とは全く違った方向に向いていたのである。「早マッタナ。」これが実感である。しかし，ここで挫折するわけにはいかない。私の学んだ専門は，きっと将来，どこかで役立つであろうことを願いつつ，学校で学ぶ以外に，芝居の本を読み，美術書を読み，サークル活動を読けてきた。正直に言って，学校で学ぶことよりもサークルの仲間と議論を交すことの方が役立ったと思っているし，その時が自分にとって生きがいだったのだと思う。私が，それなりに自己実現の為に努力してきた事は氏が言うように，人間が，本来「善きもの」であることをも証明していると思う。又，私が求める生きがいにおいて，私の置かれた環境が，ひどく満たされていなかったので，かえって可能性を求め続けたのかもしれない。なぜなら，氏は，欠如状態こそ，人間的成長の可能性そのものと成り得ると語っているからである。

就職を目前にした私にとって，この文章は，ショックであった。

「将来どんな仕事をしている自分を心に描くとぞくぞくするような戦慄が体を走り抜けるか，それを見出さなければならない。それが，あなたの潜在力であり，それを表(おもて)に出すことが，あなたの自己実現なのであり，それがあなたの生きがいなのであるから。」

残念なことに，私は，ぞくぞくするような仕事に就かないが，いつかそれを達成しようという気持ちは捨ててはいない。いつか，きっと——。そう思うことが，自分の生きがいを失なわない為の成長を導いているのではないかと思う。

氏は，女性としての生きがいについても多くを語っている。これは，たいへん興味深い問題であった。氏は，本来，女性的な自己実現とは，結婚をし，子供を生み，育てることであると言う。ここまで言いきられると「そんなバカな！」と，叫びたくなる。しかし，氏は，現代の女性が男性と同じ仕事をすることに生きがいを求めていることを知っていたのだ。そして，これが一種の時代悪であるということも。

5年前の私も，やはり男性と同じ仕事をすることに生きがいを求めていたのだと思う。しかし，今は違う。母を見ていると思う。食べたい物も食べられず，着たい物も着られずに青春時代を送った母の生きがいとは，いったい何だったのだろう。母はそれでも，生き生きとしている。子供を二人生み，育てた。それだけだろうか。そんなはずはない。母は，人前で署名をする時は，手が震えてしまう程，自分の字にコンプレックスを持っていたと言う。ところが，ある契機(きっかけ)から書道を始めた。書を見つめる母を見ていると思う。「なんて，生き生きとしているのだろう。」今の母の生きがいは，人前でスラスラと字を書くことじゃないかしら。他人から見たらつまらないことでも，本人にとっては，生きがいであることがあると思う。

私も本来の女性的な自己実現は，大切であると思う。しかし，それだけで満足したくはない。母のように，ちっぽけでも自分にとっての生きがいを見つけたい。「一度しかない人生。やり直しはきかないのだ。」と，人は言う。しかし，私はこの本を読んで，敢て言いたい。「一度しかない人生。だから何度でもやり直そう。ちっぽけな自分の生きがいを見つけるために。」

「人間らしさ」って，本当は，こんな事なんじゃないかしら。

読書について思うこと

5土　山　岸　瑞　夫

私に読書についての原稿を書いてくれとの依頼に，正直言って戸惑いを感じました。何故，本校の図書を一度も利用したことのない私が，ビブリアの原稿を依頼されるのだろうかなどという疑問を感じたからです。

何はともあれ書かなくてはと思い原稿用紙に向かいますが，その前に図書館の運営について一言，言わせて下さい。さて，私が図書館の利用を5年間，一度もしなかったのは図書館の利用方法，利用手続きが，全く我々学生を信用していない様に感じたからです。少なくとも私にはそう感じられ激しい憤りを覚えるのです。これは非常に我々学生を馬鹿にしているのではないかと思い，腹が立って図書など金輪際，利用してやるものかという考え方を植え付けさせた事件がありました。

あれは，私がこの福島高専に入学してから間もなくの事でしたが，書庫へ入ろうとすると「学生証を出しなさい」と言われ，「忘れました」と言うと，「では，書庫には，入れません」と言われました。学生服のバッジも，ボタンも高専生であることを充分に立証しているはずなのに，何故，書庫に入れないのか，自分の学校の本も自由に眺められないのか，と憤慨した事があるのです。これは私の図書利用への偏見かもしれませんが，そのことが図書館への印象を著しく悪くした事には，相違ないのです。実際，中学時代に今では考えられない程，図書を利用していました。もう少し，図書館の利用方法を学生を交えて検討すべきではないでしょうか。たとえば，書庫への出入りをフリーパスにとか，気楽に図書を利用したいものです。

そんな訳で，市街地に行って本屋に立ち寄る時は，文庫本とか新書を４，５冊まとめて買ってきては気ままに本を読む様になりました。今でもそうですが，ふらっと本屋へ行き，本がぎっしり詰まっている本棚の前に立ち，さてどれにしようかと迷いながら，一冊ずつペラペラとページをめくりながら斜め読みをします。それで，面白そうな本をピックアップしてそれを買い込んでくる訳です。私にとって本というものは，面白ければ，それで事が足りる訳でして，その時の気分次第でいろいろな種類の本を買って読みましたが，ベストセラーの本だとか，「この本を読まずして本を読んだといえない」という，いささか宣伝されている本は何だか親が子に押しつけてる様な感覚で受け取ってしまうので，抵抗したくなり，その様な本の売場は避けて，もっぱら文庫本のコーナーを探索します。ひどく私はひねくれているところがあるのでしょう。自分が読む本ぐらい自分で決定したいのです。

文庫本は，ひどく安価で，持ち運びにも便利な点から私は特に好みます。単行本で面白いものがあると，早く文庫本にならないかななんて思う程です。又，私には本の良書，悪書の区別がつかないので，文庫本にするくらいの本だから良書なんだろうと自分勝手な見解で購入する訳です。又，面白かったと思った本の作者のそれを，買い込んで読む習性が私にはあるのですが，皆さんはどうでしょうか。これも面白い本の読み方だと自分で納得していますが，実際その作者や言い分を知ろうとするならその様にして読む方が良いのではないでしょうか。又，本というものには，その作者の思想というものが潜在的に表われてくるものではないでしょうか。少なくとも私は，そう感じます。

私の読書には必然性が全くないのです。「そこに本があるから読む」という姿勢で読書をする訳です。たとえば，或る人に「本を読まなくてはいけないよ」と言われてから本を読むという事には，いささか抵抗を感じます。あくまでも読書というものは自然に行うべきものではないのでしょうか。読書を必要とする職業の人以外なら読書の必然性はなく，むしろそれは余暇を見つけて行うべきもので，余暇の範囲内での読書は精神衛生上必要なものだと思います。その余暇に本を読んでいる姿こそ読書する人の真の姿ではないのかと私は思います。肩を張って「私は読書する」と言いながらする行動こそコッケイな読書の仕方ではないのでしょうか。又，読書量が多いからといって，それで満足しているのもどうかと思います。要は，いかにしてその本を読んでいくかの点にあると思います。本の内容いかんでは，その人の心理を奥深くすることもできるのです。そこで質のある本を数は少なくても，じっくり読む事だって必要な事だと思うのです。その上で数をこなせば，すばらしい読書になるのではないかと思います。

とりとめもない文章の羅列になってしまいましたが，私が子を持つ親になった時，その子が本を読みたくなる環境を作ってやりたいと思います。自由にそして自然に本を必要と感じる感性を養ってやりたいと思います。正直言いまして，私がそうである様に努めることを怠ってはならない様に感じてきました。皆さんも，本を読む前に，何故，本を読むのか一度，振り返ってみてはどうですか。そして自分流の読書というものを考えてみても決して無駄にはならないと思います。

新着図書目録

✠印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総　記

福島民報縮刷版　昭和53年9・10月号　福島民報社✠
朝日新聞縮刷版　昭和53年9・10月号　朝日新聞社✠
福島民報年鑑　昭和54年度版　福島民報社✠
日本十進分類法　日本図書館協会✠
近藤春雄
中国学芸大事典　大修館書店
本田済　孟子（人類の知的遺産 6）　講談社✠
佐々木毅
マキアヴェッリ（同 7）　同
いわき市史編さん委員会編
文化（いわき市 6）　同
東洋文庫
340　本朝食鑑　平凡社✠
341　日本風俗備考 2　同　✠
342　甲子夜話 6　同　✠
343　東洋金鑑　同　✠

哲　学

講座現代の哲学
5　超越の座標　弘文堂✠
講座宗教学
5　聖と俗のかなた　東京大学出版会✠
諸橋轍次
対談　東洋の心　大修館書店✠
神澤惣一郎
情念の形而学　創文社
日本思想大系
54　吉田松陰　岩波書店
講座心理療法
1　来談者中心療法　福村出版
2　遊戯療法　同
3　精神分析　同
4　行動療法　同
5　催眠療法　同
6　集団心理療法　同
7　エンカウンターグループ　同

歴　史

鈴木理生
江戸の川　東京の川　日本放送出版協会✠
NHKブックス
328　花　同　✠
日本の山河
38　天と地の旅　群馬　図書刊行会✠
40　同　茨城　同　✠
明治大正図誌
2　東京（二）　筑摩書房✠
J. ファング
ヒルベルトの世界　東京図書
リワノリ
リーマンとアインシュタインの世界　同
ディック
ネーターの生涯　同
C. M. バウラ
キリシャ人の経験　みすず書房
R. W. サザーン
中世の形成　同
ジャケッタ. ホークス
古代文明史 1　同
高田宏　言葉の海へ　新潮社✠

社会科学

昭和53年版　福島県自治便覧　福島民報社✠
日本民俗文化大系
9　白鳥庫吉　鳥居龍蔵　講談社
10　西田直二郎　西村貞次　同
R. M. ジング
遺伝と環境（野生児の記録 4）　福村出版
NHKブックス
327　私の小学校留学記　日本放送出版協会
331　計量経済学　同
江夏三郎
英国の賃金雇用および労働生産性　慶応堂書店
大木亀　学校新聞の作り方　明治書院✠
J. M. G. イタール
新訳 アヴェロンの野生児　福村出版

自然科学

増訂化学実験事典　講談社
最新地下水学　山海堂✠
田村一郎
トポロジー　岩波書店
日野幹雄
スペクトル解析　朝倉書店✠
戸田盛茂
リーマン面　サイエンス社
チャーチル. ブラウン
複素関数入門　マグロウヒル好学社
山県登　生物集編―環境科学特論　学文図書
高橋美一
比較植物栄養学　養賢堂
塚本正文
計算尺活用法　基礎編　応用編　理工図書
村上次郎
実用百科計算尺の使い方　金園社
小西省三
例解演習実験計画法　日刊工業新聞社
横部邦夫
実験計画法入門　同
同　条件の決め方　同
服部晶夫
多様体　岩波書店
F. S. mthies
自然科学者のための積分方程式論　講談社
越昭三　測度と積分　共立出版
吉田耕作
函数解析と微分方程式　岩波書店
栗田稔　写像　共立出版
小林昭七
曲線と曲面の微分幾何　裳華房
田辺広城
関数解析　上　実教出版
小平邦　近代函数論 I・II　森北出版
島山洋二
多様体入門　同
鈴木信　初等数理解析　同
石黒一男
発散級数論　同
高見穎郎
調和解析学　槇書店
藤崎源二郎
岩波講座基礎数学 21　岩波書店
キッテル
熱物理学　丸善✠
藤本武助
流体力学入門　養賢堂✠
石谷茂　数学の頂点とその解明　ε－δに泣く　現代数学社✠
飯塚幸三
JISとSIに基づく量記号・単位記号の使い方　オーム社✠
鈴木義一郎
データ解析学　実教出版✠
甲藤好郎
伝熱概論　養賢堂✠
J. M. ケイ
流れ学　基礎と応用　培風館✠
W. メヒトレ
身近な物理学　講談社
W. リックスナー
身近な化学　同
安田斉　花色の生理　生化学　内田老鶴圃
建設省河川局編
雨量年表　第24回昭和51年　日本河川協会
越後雅夫
だれでもわかる解説と熱力学の基礎　啓学出版✠
R. W. サウスワーク
電子計算機のための数学 1・2　共立出版✠
川畑正大
電子計算機のための数学　日本経営出版会✠
竹内外史
数学基礎論　共立出版✠
中岡稔　位相幾何学　ホモロジー論　同　✠
アイブル＝アイベスフェルト
比較行動学　みすず書房
竹内外史
現代集合論入門　日本評論社
W. E. Williams
フーリエ級数と境界値問題　共立出版
中塚利直
時系列解析の数学的基礎　教育出版
L. V. Azaroff
X線結晶学の基礎　丸善
数理科学シリーズ
8　関数環　培風館
シリーズ新しい応用の数学
12　最近展開　教育出版✠
17　共役勾配法　同　✠
現代教養文庫
668　楽しい数学　社会思想社✠
NHKブックス
329　神秘の光オーロラ　日本放送出版協会✠
理工学基礎講座
数学概論　朝倉書店✠
初等数学シリーズ
2　集合と点集合　同
産業応用化学講座

16　光化学　コロナ社
大学講座機械工学
23　流れ学　共立出版㊥
実験物理学講座
9　音響と振動　同　㊥
Andre Weil
Foundations of Algebraic Geometry　A. M. S.

工学・技術

リニアICの応用設計実例追補資料最新演算増幅IC応用回路集　理工研究社
カラー空中写真判読基準カード集　日本地図センター
昭和54年度建設要覧　産業技術会議
雨量年表　第29回昭和51年　日本河川協会
土木建設技術者のための最新基礎設計施工ハンドブック　建設産業調査会
廃棄物の処理再利用　技術資料センター
第10回下水道研究発表会講演集　昭和48年度～53年度　日本下水協会
公害防止の技術と法規　振動編　通商産業省立地公害局
内燃機関の燃焼　山海堂㊥
機械工学ポケットブック　オーム社
新編機械製作　養賢堂
ソ連の炭坑技術 1962　日本石炭協会
分冊機械工学便覧 4・8　日本機械学会
機械振動入門　丸善
高張力鋼溶接のかんどころ　産報
昭和53年電気学会東京支部新潟地区大会講演論文集　昭和53年11月　電気学会
本州四国連絡橋（児島・坂出ルート）環境影響評価書　海洋架橋調査会㊥
同　資料編　同　㊥
技術文献調査資料Data No MB-315セットA
都市計画における意思決定研究　特許技術資料センター
改訂建設省河川砂防技術基準（案）調査編　計画編　日本河川協会㊥
C. L. ディム
材料力学と変分法　ブレイン図書
保美光　固体力学概論　コロナ社㊥
藤生一太郎
冷凍機の理論と性能　日本冷凍機械㊥
スチリコビッチ
蒸気工学実験法　コロナ社㊥
渡部康一
応用熱力学例題演習　同　㊥
日本経営工学会編
経営工学便覧　丸善㊥
工業計測法ハンドブック　朝倉書店㊥
大道寺達
自動車工学概論　工学図書㊥
神元五郎
高速流動　コロナ社㊥
遠藤健児編
経営工学用語辞典　日刊工業新聞社㊥
樹淵勘蔵
工業経営概論　同　㊥
技術者のための原価計算　同　㊥
河野俊助編
新油圧技術読本　同　㊥
J. W. Martin
ものの強さの秘密　共立出版㊥
黒木剛司郎
金属の強度と破壊　森北出版㊥
高井宏幸
実用自動制御ポケットブック　オーム社㊥
久田文夫編
油圧工学の基礎　日刊工業新聞社㊥
一色尚次
明日をひらく省エネルギーアイデア10選　工業調査会
公害試験問題研究会編
公害試験問題の傾向と対策　大気編
水質編　オーム社
井出哲夫編
水処理工学　技報堂出版
辻　茂　例解演習　油圧工学　日刊工業新聞社㊥
城谷俊一
機械加工時間計算法　同　㊥
遠藤元男
日本の伝統技術と職人　横書店㊥
中原一郎
応用弾性学　実教出版㊥
セレンセン, コガエフ
機械要素強度計算便覧　森北出版㊥
竹内淳彦
日本の機械工業　大明堂㊥
阿坊隆　現代技術の再評価　工業調査会㊥
西田正孝
材料力学　森北出版㊥
石川七男
ウズ巻ポンプの設計　技報堂㊥
P. Gordon
平衡状態図の基礎　丸善㊥
藤住松二郎
非鉄金属および合金　内田老鶴圃新社㊥
C. M. Wayman
マルテンサイト変態の結晶学　丸善㊥
井原敏男
熱工学概論　理工図書㊥
佐々木正治
実用温度測定　日本熱エネルギー技術協会㊥
杉田稔　現場で役立つ機械設計の勘どころ　日刊工業新聞社㊥
樋田武男
歯車加工ハンディブック　同
佐野清人
自動化のための切削加工技術　同
吉田邦彦
超硬工具　同
山崎好知
技能の訓練手仕上作業　同
山岸正雄
NC工作機械　同
加藤ライジ
機械工学英語　工学図書
桑添正　精密測定学　養賢堂
ジークフリート, シラー
真空蒸着　アグネ社
牧口利貞
ガス型鋳物　日刊工業新聞社
幸田彰　図学と製図.　培風館
日本鋳物協会編
鋳物便覧　丸善
三宅英之助
鉱山機械　朝倉書店
小川喜代一
鋼の化学熱処理　養賢堂
鈴木徳敬
圧力容器管弁　誠文堂新光社
藤住松二郎
鋳物砂と鋳型材料　日刊工業新聞社
井上長治
配管工学演習　産業図書
福本保　JIS規格による最新機械製図　横書店
壹場孝雄
機械設計法　朝倉書店
和田稲苗
治具取付具の基礎知識　オーム社
中田孝　歯車とその検査　同
牧野昇　金属の試験と測定の実際　同
渡部一郎
カスタービン　同
内海龍夫
コロガリ軸受の検査法　同
山本洋一
金属防食技術の実際　同
呂茂長　金属表面加工法入門　同
田田進一
金属の疲労と設計　同
高橋利衛
機械振動とその防止　同
中村伸　セメント代用土の研究　産業図書
日本金属学会編
球状黒鉛鋳鉄の理論と実際　丸善
林茂彦　正しい工程管理の知識　技報堂
高張力鋼デザインマニュアル　共通編　理工図書
小野東投
機械応用力学　コロナ社
岸岡英太郎
工業熱力学　同
鈴木徳敬
機械設計　共立出版
奥林十四正
よくわかる溶接溶断作業法　理工学社
内丸最一郎
送風機及圧縮機　丸善
小津延之助
電機問題演習　修教社
エム. ペ. ノヴィコフ
機械組立作業　産業図書
桂田徳勝
送電及送電器具　工業図書
畑場重男
実用機械工学演習　横書店
中野幸久
精密測定　日刊工業新聞社
西野治　新制電気測定　オーム社
林作雄　機械要素（1）　コロナ社
太田友弥
新制材料力学　山海堂
内田宗義
鄙蔵土　北隆館
西彰雄　機械工作法　上巻　横書店
小坂猟二
基礎機構学　理工図書
清水篤慶
改訂材料力学　共立出版
日本鉄鋼協会編
製鉄製鋼法　地人書館
鋼材製造法　同
鋼材加工法　同
北陸地方建設局
二十年史　北陸建設弘済会
平尾収　理論自動車工学（自動車工学講座 4）

山海堂
角田秀夫
フリップ・フロップ回路の計数回路の設計
電気大出版局
日本コンクリート工学協会編
コンクリート便覧　技報堂
宮崎誠明
コンクリートの特性　共立出版
鋼構造塑性設計指針　日本建築学会
小西一郎編
鋼橋　基礎編 1・2　丸善
J. G. Truxal
技術評価の工学入門　オーム社
H. Julich
マイクロコンピュータ入門
日学技術出版社
小玉正雄
ばね使用と設計のポイント　日本規格協会
大和久重雄
JIS鉄鋼材料選択のポイント　同
福永太郎
JIS使い方シリーズ機械製図マニュアル
同
江守忠義
JIS標準数活用マニュアル　同
藤田譲　塑性設計法　森北出版
チモシェンコ・ヤング
構造力学　上　下　ブレイン図書
板とシェルの理論　上　下　同
G. N. スミス
有限要素法による応力解析入門　同
吉田信夫
土木技術者への計画と管理のための予測
手法　山海堂
岸本進　土木法規の基礎　工学出版
小玉正雄
配管とポンプの設計　実業図書
関口有方
測量学読本　共立出版
土木工事に伴う測量の進め方シリーズ
1　河川工事に必要な測量の進め方
技報堂出版
2　道路工事に必要な測量の進め方　同
3　同　同
4　同　同
5　曲線のあてはめと工事に関する測量
同
6　測量と数学との関連例　同
飯吉精一
土木建設技術草　同
土木に生きるまた楽しからずや　同
土木奏歩みと心とかたち　同
土木建設方式記　同
H. シュトラウブ
建設技術史　鹿島出版
近畿高校土木会編
土木応用力学　オーム社
成岡昌夫
ニューマークの数値計算法　技報堂出版
飯田隆一
土木工学における岩盤力学概説　彰国社
岩津健　地盤の調査判定と活用　鹿島出版
宝井修　長方形ラーメン解法　共立出版
中村英夫
測量学　技報堂出版
横山幸満
くい構造物の計算法と計算例　山海堂
高架構造研究会編
道路橋の点検補修　理工図書
川本眺万
地盤工学における有限要素解析　培風館
横木武　トンネル力学　共立出版
守屋喜久夫
地震災害の防止と対策　鹿島出版会
土木工学会編
鋼構造架設設計指針　土木学会
地下構造物の設計施工　同
青函トンネル土三研究調査報告　同
斜張橋資料集成　同
構造物の安全性信頼性　同
製図のかき方　同
建設プロジェクトの進め方　同
橋 1976－1977　同
凍土に挑む　東京法令出版
土田庄一郎
下水道きょの計画と設計計算
現代理工学出版
河川砂防地設等構造令研究会編
解説河川管理施設等構造令　山海堂
P. B. Hirsch
透過電子顕微鏡法　コロナ社
為谷誠八
技術と調練施盤作業　日刊工業新聞社
井戸守　施盤工作法　同
土木学会編
測量実習指導書　土木学会
土木工学大系
2　自然環境論 1　彰国社
12　計画論　同
13　景観論　同
14　環境アセスメント　同
16　施工論　同
18　国土調査論　同
19　地域開発論 1　同
20　同 2　同
24　水資源　同
28　環境衛生　同
31　土地開発　同
33　ダム　同
機械工学基礎シリーズ
3　加工の力学　朝倉書店
移動論　同
高分子工学講座
2　高分子の物理学　地人書院
4　化学繊維の紡糸とフィルム成形　同
5　プラスチック成形材料　同
6　プラスチック加工　同
7　ゴムの性質と加工　同
8　熱硬化性樹脂とその加工　同
9　接着と積層　同
10　色材工学塗料顔料印刷インキ　同
11　プラスチック成形機械と成形技術 1・2
同
14　高分子材料試験法　同
エンジニアリングサイエンス講座
2　訂測論　共立出版
28　固形の強度　同
NHKブックス
326　都市環境の美学　日本放送出版協会
設計工学シリーズ
4　生産性設計　丸善
現代土木工学
5　土木構造設計　同
土木施工法講座
1　土木施工法　山海堂
2　道路施工法
11　砂防地すべり防止急傾斜地崩壊防止
施工法　同
26　土木施工管理　同
大学講座機械工学
25　流体機械　共立出版
機械工学講座
9　精密測量　同
機械工学講座
15　内燃機関　コロナ社
わかりやすい測量シリーズ
2　三角測量　日本測量協会
3　多角測量　同
4　写真測量　同
6　地図編集（2冊）　同
7　応用測量（2冊）　同
別巻測量の誤差と最小二乗法　同
わかり易い機械講座 8
鋳造　彰国社
表面処理　日本金属学会
非鉄材料 I　同
耐熱合金　同
非鉄材料 II　同
鉄鋼 I・II　同
原子力材料　同
非鉄金属製錬　同
電気材料　同
鉄鋼 III　同
鋳鉄　同
磁性材料　同
耐熱合金　同
わかり易い土木講座
10　コンクリート工学（1）施工　彰国社
Hans Muess
Verbundtraeger im Stahlhochbau
Verlag Von Wilhelm Ernse
Bnam Hackett
Landscape Reclamation　IPC

産　業

石材石工芸大事典　鹿倉新書
赤木新介
交通機関論　コロナ社
これからの交通パラトランジット
運輸経済研究センター
竹内勝三
舶用エンジン　開発社

芸　術

1976年度日本体育協会スポーツ科学研究
報告書　日本体育協会
1977年度日本体育協会スポーツ科学研究
報告書　Vol.1　同
NHKブックス
325　音楽以前　日本放送出版協会
日本絵巻大成
別巻一遍上人絵伝　中央公論社
21　北野天神縁起　同
新修日本絵巻物全集
24　年中行事絵巻　角川書店

語　学

小学館ランダムハウス英和大事典　上巻
A～L（パーソナル版）　下巻　M～Z
（同）　小学館

NHKブックス
330　意味の世界　日本放送出版協会☆

新釈漢文大系
67　国語　下　明治書院☆

国廣哲弥
日英語の比較　研究社出版

荒木一雄
学習英文法　同

T. R G. Lyell
英語日常語辞典　北星堂書店

本間徹夫
高校生のための文章読本　一光社☆

Longman Dictionary of Contenporary English　Longman

Websters Students Thesaurus　Merriam

The Teaching of English in Japan　Eichosha

Cassells German-English-German Dictionary　Macmillan

文　学

藤川哉子
千字文略解　明治書院☆
定本上田敏全集 3　教育出版センター☆
露伴全集 13. 14　岩波書店☆

山脇百合子
ギャスケル研究　北星堂書店

山崎荘八
燃える軌道 5　学習研究社☆

小川徹　堕落論の発表　三一書房☆

井上靖 他
西域をゆく　潮出版☆

加藤秋邨
連谷往来　花神社☆

犬養孝　万葉の人びと　PHP研究社☆

佐藤和夫
与謝野晶子「舞姫」評釈　明治書院☆

世界の文学
7　セリーヌ　集英社☆
29　コルターサル　同

Timothy O'Sullivan
Thomas Hardy An Illustrated Biography　Macmillan

T.S. Eliot
To Criticize The Critic and Other Writings　Faber

W. A. Craik
Elizabeth Gaskell　Methuen & Co

John Halperin
Trollope and Politics　Macmillan

Robert Liddell
The Nouels of George Eliot　Duckworth

Gordon S. Haiget
George Eliot A Biographg　Oxford

Coral Lansbury
Elizabeth Gaskell　Paul Elek London

James R. Rincaid
The Novels of Anthony Trollope　Oxford

Winifred Gerin
Elizabeth Gaskell　同

John W. Clark
The Language and Style of Anthony Trollope　Andre Deutsch

Earl A. Knies
The Art of Charlotte Bronte　Ohio University

Brry Westburg
The Confessional Fictions of Charles Dickens　Northern Illinois